

第 41 回(2024 年度)井上研究奨励賞を受賞して

極限コヒーレント光科学研究センター 原田研究室 特任助教 島村 勇徳

本賞は、①理学・医学・薬学・工学・農学等の分野で過去 3 年の間に博士の学位を取得し、②37 歳未満の研究者で、③優れた博士論文を提出した若手研究者を対象としており、井上科学振興財団から 40 名に贈呈されます。研究奨励賞の他、後述の井上リサーチアワードおよび井上学術賞も含めて、2025 年 2 月 5 日に KKR ホテル東京で授賞式が行われました。

授賞式の当日、「奨励賞は初めての論文アクセプトの時に、リサーチアワードは初めてのラボを持った時に、学術賞はラボメンバーの成長と自立を見た時に、それぞれの節目で贈賞されるもの」と説明されていました。一回限りの成果に対して贈賞されるのではなく、研究者のキャリアを見守り、伴走するような賞があるのかと、その趣旨に感激しました。実際、唯先生(学術賞受賞)や図 1 に写る山田先生(リサーチアワード受賞)も、キャリアを通じて受賞されたそうです。

そうした先人と共に一堂に会する機会は、そう多くない気がします。そのせいか、授賞式でまず印象的だったのは、学術賞受賞者からのスピーチでした。学術賞受賞者は国内外でラボを確立しています。これまでの自身の研究を総括するスピーチや、研究者としてのキャリアの変遷を辿るスピーチがありましたが、全く異なる分野・経歴故に話に惹きこまれてしまい、思わずメモを取りました。自分の専門分野(私で言えば、X 線集光ミラー)だけでなく、関連分野(私で言えば、光学や応用物理学)を俯瞰・横断する視座の高さとスケールの大きさに心躍りました。キャリア変遷の話題であれば、ノーベル賞受賞研究に携わったこと、出産を機に研究キャリアを中断したこと等、キャリアパスを不連続にするような出来事が印象に残っています。どのスピーチでも意外な転換点が語られていて、自身の研究生活でも似た点を見出せるか、自問しています。

スピーチ中に「学生から見た大学教員の姿には、なんだか元気が夢が無いように見える(ので魅力を伝えていきたい)」という一言がありました。学生と大学教員の過渡期にあるポストドクとして耳が痛い指摘です。私自身は、元気が夢が存在しない訳ではなく、また、苦労や多忙さはどの立場にも存在すると考えています。一方で、それらを乗り

越えた先の未来が大学教員として想像しにくい状況、あるいは、未来を想像できていてもその魅力が学生に共有できていない状況を指摘していて、「なぜそこまでして大学で研究したいのか」が学生に伝わっていないという問題提起だと解釈しています。その点、壇上でスピーチに立つ先生方は覇気に満ちており、研究によって世界を変えられることを心から楽しんでいらっしやるように見えました。式後の交流会にて、私は唯先生や南後先生(共に学術賞受賞)を捕まえて、これまでのキャリアの変遷や大学教員として意識することについてお聞きしました。家庭を持ちつつ、学生や後進に元気と力を与えるような先生方の姿を見て、素直に素敵だと感じました。先の問題提起に対する答えを、私は未だ探っています。しかし、先陣を切って分野を創生・開拓しつつ、後進を育てる大学教員像を垣間見て、研究のみを行う研究職との違いに実感が湧いた一日でした。

こうした機会の発端となった私の博士論文では、軟 X 線を回折限界でナノ集光する X 線集光ミラーについて、その開発と応用をまとめました [1]。指導教員だった三村秀和教授(先端研)や物性研構成員含む共同研究者にご協力いただいたことに、感謝申し上げます。



図 1 放射光 X 線分野で受賞した若手 3 名(左は同賞受賞の山本博士、右はリサーチアワードを受賞した山田助教、中央が筆者)。

[1] 物性研だより第 65 巻第 1 号の受賞報告で概要を記載しています